

中西 準子



産業技術総合研究所
化学物質リスク管理研
究センター長(環境工学)

こなかにし・じゅんこ
1938年生まれ。東京博
東大大学院工学系大
士課程修了。東京大
学環境安全研究セン
ター教授など。環境
リスク学」著書に「環

今回の答申原案は事実上のはぐらかし
判断できないなら新しい調査会が必要

食品安全委員会(以下調査会)は、
米肉産牛肉のリスクに関する
国からの諮問を、事実上はぐ
らかすような答申原案をまと
めた。その結論は分かりにく
いが、敢えて言い換えるれば、
米政府の提示する安全策

が、安全を確保するものであ
れば、リスクは小さいと言っ
ておいては、一体専門調
査会は、これまで何を議論し

リスク低いと言えぬ

てきたのか首をかしげざるを
得ない。
調査会は米政府の提示す
る方法に対しての特定危険部
位の除去の保証がない(食肉
処理場での獣医師の立ち会い
がないなど)②BSEの検出
感度が低い③月齢の確認方法
に限界、などを指摘する。
特定部位除去の管理方法に
ついては、西国の文化の違い
が大きく反映している。欧州
の学者に日本比較を依頼して
みるのも面白いと思う。私の
立場は中立だが、もし心配な
らば、米国の方法がかなり悪
いと仮定して、計算できる。
米国のBSE検出感度が日
本より低いのは事実であるの

で、この違いを定量化してリ
スク評価に組み込むことはい
い。しかし、最終的なリスク
算定の基礎に使うデータが、
より安全な英国のものである
ことを考えると、この差は
あまり意味がない。
さらに、月齢特定について
の米国の方法が100%確実
でないことは事実だと思っ
た。仮に21カ月以上の24カ月
齢が1%いたとしても、その
リスク増加は計算してみれば
分かるが、実に小さい。
では、リスクはどのくらい
か。それを簡単に実感でき
る事実がある。30カ月齢以下
は、日本への輸出肉のような
危険部位の除去を行わず、ま

後100年間に1000人強
の患者が出るはずである。も
ちろん、こんなことは起きて
はない。申し訳ないような
気もするが、米国人が食べて
いることは、1000倍以上
の検出力で試験してもらって
いるようなものなのである。
このような状況であるが、
調査会が独自の見解でリス
クが大きいと考えるとするは、
それはそれで首を傾げたい。
しかし、調査会の今回の結論
が、もし「評価できない」と
いうのであれば(実はこれが
はつきりしないのだが)、そ
れは、重大な問題だと思っ
た。リスク評価の世界には中
立もモトリアリもない。評価
できないと言ったらそれは、
あるリスク評価の結果を意味
する。この場合には、米肉牛
のリスクが高いことを意味し
てしまうからである。厳しい
ことだが、どんなにデータが
少なくとも、リスク評価はあ
る結論を出さねばならないの
である。したがって、もし、
調査会としてリスクについて
判断できないという見解なら
ば、一刻も早く解散し、新し
い調査会を組織すべきではな
いだろうか。

た20カ月齢以下という条件の
ない牛肉を食べている米国の
状況を見ることである。
米肉からの輸入牛肉で、仮
に日本に100年に1人の変
異型クローンフェルト・ヤコ
ブ病の患者が出るリスクがあ
ったとしよう。それは牛肉
の消費が日本よりはるかに多
い米国では小さく見ても、今